

関西文学遺跡・その2

関西文学遺跡 その2

花屋跡・義仲寺

杉本真理子

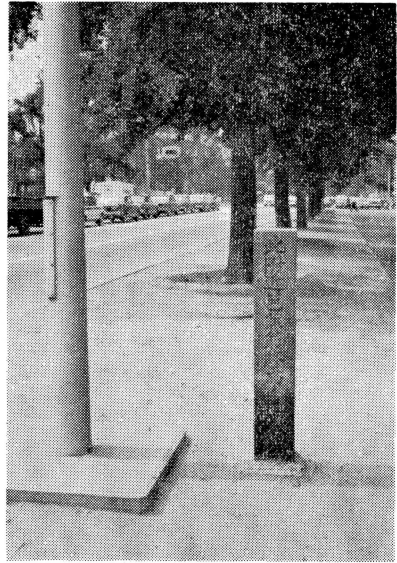
竹島智子

花屋跡

広い道路の中を、東西二列に整然と走る街路樹、豊かな新緑の葉を身につけて、ふつくと太ったそのイチヨウの並木が、いかにも印象的な御堂筋を、私は南久太郎町の花屋跡に向かつて南へ南へと歩いていった。御堂会館、そしてその奥に建っている難波別院南御堂の屋根を右前方に見た私は、その少し手前の東側の並木路が、放物線上に丸く切れているその端に、一本の石碑が立っているのを認めたのである。まさしくそれは、花屋跡を示す石碑であった。「此附近芭蕉翁終焉ノ地ト云フ」と、楷書で明瞭に刻まれた文

字を読みとつた私は、自動車の列の少しの切れ目をぬって並木道の方へ駆け寄つた。たてよこ二十センチメートル、高さ約一メートルのこの石碑には「昭和九年三月建立大阪府」と刻まれていた。が、そのわりには下の方が少し黒ずんでいるだけで、どこも傷んではいないのに驚いた。おそらく、繁華な街中に立つているとはいえ、道路の中の孤島にあるために、かえつて人の手に触れられることの少ないことが幸じているのであろう。石碑と並べて、その間一メートルと離れていない所に、モダンでスマートな水銀灯が立てられていた。それはまるで、時代の推

移のはかなさのようなものを、むりやりに感じさせるために、わざと演出されているかのようであつた。「なにも、こんなにそばに立てなくてもよきそんなものなのに……」、私はつくづく怨めしく思つたのであつた。道路や建物など、すべて灰色に統一されたような背景の中にあつて、やはり灰色をしたこの石碑は、まさに目立たない存在であつた。歩道を行く人達は、まったく目をかけることをしなかつた。歩道に戻り、走る車と車の間からチラッチラッと見え隠れする石碑を顧みた私は、世間から忘れ去られた「孤独な石碑」に、佯びしいものを感じずにはいられなかつた。しかし、花屋の家が残つているならともかく、単なる石碑を見て興奮している自分の方がおかしいのかもしれない……と思えてきたことも事実である。その時、私は何者かにせきたてられるようにして、花屋の裏座敷のイメージを頭の中に描こうと努めたのであつた。



跡 屋 花

こぼかりは暗くかげりながら、身にしみるように冷や冷やする。その障子の方を枕にして、寂然と横たわった芭蕉のまわりには、まず

医者の木節が、夜具の下から手を入れて、間遠

大阪の生玉辺に到着し、膳所から大阪に移居していた酒堂亭を宿としたのであつた。

菊に出て奈良と難波は宵月夜

十三日、十三夜の月見をかけて住吉神社の栴市見物に出かけた芭蕉は、十四日には睦止亭、十九日は其柳亭、二十一日には車庸亭と俳諧の席に列する多忙な日を送つたのである。

升買で分別かはる月見かな

秋もはやばらつく雨に月の形

秋の夜を打崩したる咄かな

二十七日、斯波一有という医者の子園女が催したその家の句座に出席した芭蕉は、この夜の園女亭での餐応が身にさわつたのか、急に悪感が出て疫病の徴候となつたのである。

しら菊の目にたてて見る塵もなし

二十八日、睦止亭に休息した芭蕉は、翌二十九日の芝柏亭興行の句会には出席せず、発句のみを遺したのであつた。

秋深き隣は何をする人ぞ

二十九日の夜から十月一日の朝にか

元禄七年五月、西国（九州）への旅を思いたち、次郎兵衛を伴つて江戸を出た松尾芭蕉は、郷里の伊賀上野へ立寄り、大阪に入つたがそこで病に臥し、御堂前南久太郎町の花屋仁左衛門の裏座敷で、同年十月十二日の夕刻、五十一歳の生涯を閉じたのである。

—— 隔ての襖をとり払つた、だだつ広い座敷の中には、枕頭に炷きさした香の煙が、一すじ昇つて、天下の冬を庭さきに堰いた、新しい障子の色も、

い脈を守りながら、浮かない眉をひそめていた。—— 『枯野抄』——

後髪をひかれる思いで幾度も石碑を振り返りながら、次いで私は辞世の句碑を見るために、難波別院南御堂に足を向けたのであつた。

九月八日、芭蕉は支考、惟然、次郎兵衛を同伴して、舎兄半左衛門はじめ郷里の人々に見送られて上野を立ち、奈良に向かつた。九日の菊の節句に古都の寺々を巡つた芭蕉は、その夕刻に

関西文学遺跡・その2

けて下痢がはじまり、このころから芭蕉は急に衰えを見せはじめた。翁の病状に不安を感じてきた付添の門弟達は、五日、静かな御堂前の花屋仁左衛門の裏座敷に芭蕉を移し、急を各地の弟子達に報じたのであった。七日にはその報せをうけて、湖南の正秀、京の去来、ついで乙州、木節、文章、李由らが、翁の病床に馳せつけたのである。八日の夜更けて、芭蕉は介抱にあたつている吞舟を呼んで墨をすらせて「病中吟」を書きつけたのであった。

旅に病で夢は枯野をかけ廻る

十日、いよいよ死期の近づいたことを自覚した芭蕉は、支考を呼び遺書三通を認めさせ、伊賀の兄半左衛門宛の書簡一通を自ら認めた。十一日、「吾生死も明暮にせまりぬとおぼゆればもとより水宿雲棲の身のこの薬かの薬とてあさましうあがきはつきにもあらず、ただねがはくは老子が薬にて最後までこの唇をぬらし候半」(『笈日記』)と木節に頼んだ芭蕉は、この日の朝か

ら食欲も絶えたのであった。十二日、門弟達がいよいよ最後かと次の間に集まつているうちに、小春日のあたたかい申の刻(午後四時頃)ねむるように入寂したのであった。

遺骸には、そつと着物などがうちかけられ長櫃に納められて、その夜のうちに去来、其角、文章、支考、乙州、惟然、正秀、木節、吞舟、次郎兵衛の十人に守られて、川舟で天津へと運ばれた。十三日の朝、墓と定めた義仲寺に着いた遺骸は、十四日、その遺志どおり木曾義仲の墓に並べて埋葬されたのであった。

句碑は元、難波別院の北築山に立てられていたのであるが、昭和十年五月に、先程の石碑の後に移されたのであった。しかし最近再び境内に戻され、現在に至っている。西側の歩道へ移ると、もうそのすぐ眼の前に建つ御堂会館の玄関を貫いて、私は南御堂の境内に入つていった。句碑は、北側の一番

奥の隅に立てられていた。「旅に病てゆめは枯野をかけまはる」と刻まれた文字を認めることができる程の距離に近づいた時、初めて見た句碑であるのに、私はなぜか懐かしいものを感じた。一七〇センチはあるであろう、私よりはるかに背の高い句碑である。古びてはいるが、まるで元禄時代の浮世絵に描かれている女性の姿を思わせるような形をしたこの句碑に、非常に親しみを感じたのであった。私はさつそく指で文字をたどつてみた。そして句碑の面の左下の所に、注意して見なければ、つい見おとしてしまい、そんな「はせを」と刻まれた文字を読みとつた。句碑の横、背後に、こじんまりと植えられた木々は、美しく手入れがなされていた。その木々への気の配りに、私は句碑が大事に扱われている事を認めた。この句碑がこの場所からも二度と移しかえられることのないようにと祈りながら、私は再び騒音の歩道に出た。

(杉本真理子)

義仲寺

私達が膳所駅で降りて義仲寺へむかつたのは、六月十七日午前十一時頃であつた。例年なら梅雨期であるが、今年は晴天の日が多く、この日も晴天に恵まれた。

義仲寺に着くと、門より高くすがれた芭蕉の茂っているのが、まず目にはいる。門前には、「はせを翁墓所」そのむかつて右に「朝日將軍木曾義仲御墓所」の碑が並び、さらにその右に昭和三十六年一月に大津市が書いた義仲寺の説明札が立っている。

義仲寺は、滋賀県大津市馬場町（昔の粟津が原）一丁目であり、天台宗寺門派に属している寺である。寿永三年（一一八四）に木曾義仲は、源範頼・義経の軍に追撃されて、粟津で戦死し、その地に葬られた。天文一二年（一五四三）に近江守護・佐々木高頼が、石山寺参拝の帰途、その跡をとむらい一堂を建てたのが、この寺のはじまりである（『日本百科大事典』）。

芭蕉がはじめて大津を訪れたのは、

貞享二年（一六八五）春で、

大津に至る道山路を越えて
山路来て何やらゆかしすみれ草

湖水の眺望

辛崎の松は花より臙にて

の句が『野晒紀行』に見えている。翌貞享三年には、蕉風開眼といわれている「古池や」の句が作られている。

その後、元禄二年（一六八九）には、

義仲の寢覚の山や月悲し

を句作し、翌元禄三年八月中旬に義仲寺へはいつたと見られる。なお、元禄三年四月初旬、国分山の幻住庵にはいつており、

先づたのむ椎の木もあり夏木立

を句作している。

元禄四年（一六九一）には水田正秀

らの世話で、義仲寺に無名庵を営み、十

五夜は門弟と観月の宴を催している。

月見に興じた作品が多いが、中でも、

三井寺の門たたかばや今日の月

は人口に膾炙している。（元禄五年刊、其角著の俳諧文集である『雑談集』には、この句の前書として「於大津義仲庵」が見えている。）なお無名庵にはいつた頃『猿蓑』が企画されたといわれる。元禄四年九月には無名庵を去つており、その後、元禄七年六月下旬から七月五日まで無名庵にいた。

無名庵という名のおこりは、義仲が元禄九年粟津で討死したその墓に、一尼がしばしば訪れようになり、里人がその名をたずねたところ、「名も無き者よ」と答えたという伝説による。その人が巴御前であつたというところから、義仲寺は別名「巴寺」「木曾寺」ともいわれている。

元禄七年（一六九四）十月十二日に芭蕉は大阪で没したが、「木曾殿と塚をならべて」（元禄七年刊、其角編『枯尾花』）という遺言により、遺骸が義仲寺に着いたのは、十三日朝で、十四日には木曾義仲の墓にならべて埋葬された。葬儀の導師は義仲寺上人直愚

西関文学遺跡・その2

である。『枯尾花』には「ふしみより義仲寺にうつして、葬礼、義信を尽し、京、大阪、大津、膳所の連衆、披官従者迄も、此翁の情を慕へるにこそ、まねかざるに馳来るもの三百余人也。(中略)門前の少し引入りたる所に、かたの如く木曾塚の右に並べて土かいをさめたり。おのづから古りたる柳もあり、かねての墓の契りならんと、そのままに卵塔をまねび荒垣をしめ、冬枯のばせを植えて名のかたすみとす」。と書かれている。墓石は、元禄七年十月十八日の初七日に、表に「芭蕉翁」の三字、裏には没時を刻んでできた。また、初七日に其角の、

なきがらを笠に隠すや枯尾花

を発句として、連衆四十三人の追善百韻が作られた。これより六七七日(十一月二十三日)に、義仲寺でつくられた追善歌仙に至る追悼の諸作と、其角の『芭蕉終焉記』とあわせて、『枯尾花』が編纂された。元禄六年には、路通の『芭蕉翁行状記』が刊行された。こうし

て芭蕉は遺志どおり義仲寺で永眠し、門人の追悼集もできていった。(頼原退蔵・加藤楸邨氏著『芭蕉講座』第一、二、三卷、小宮豊隆・麻生磯次・能勢朝次氏監修『芭蕉講座』第四卷、野田宇太郎氏著『関西文学散歩』中巻等参照)。

さて、義仲寺の門をくぐると、手入れのゆきとどいた境内の景物が、すがすがしい気分にくれる。境内には、朝日堂、翁堂、無名庵の建物と、木曾塚、芭蕉塚、昭和再建碑、歴代俳人の句碑がある。

朝日堂は、中央通路を行くと右方にある。義仲をとむらうために、江戸時代中期頃建立されたといわれる、瓦葺平屋建て義仲寺本堂にあたる。本尊は木彫聖観世音で、義仲・義隆父子二公



芭蕉翁之墳(義仲寺)

の木像及び芭蕉以下二十三位の位牌二十一基を安置する。

中央通路をはきんで、朝日堂のむかい側にある宝篋印塔が義仲塚で、建立年代、建立者共に明らかでない。

義仲塚に並んでむかつて右方に芭蕉塚がある。高さは約一メートルで、玉垣に囲まれ台座の上であり、墓石は黒味がかつた先の尖った自然石である。

正面突当りに、質素重厚感のする方形茅葺の翁堂がある。堂内の正面祭壇に、芭蕉翁の胸像(高さ約五〇センチ

メートル)を安置している。左右壁間には、其角以下素堂に至る三十六俳士の画像をかかげ、天井は花沖筆四季花卉の図である。創立は宝暦十年頃であるが、宝暦十三年(一七六三)芭蕉七十回忌に参詣した蝶夢(享保十七年—寛政七年、京都の俳人で『蕉門俳諧語録』『芭蕉翁絵詞伝』『芭蕉翁笈句集』などの著書がある。)が荒廃を嘆いて再建を志し、明治七年(一七七〇)に再建した。ところが、安政三年(一八五六)二月七日に類焼の厄にあつた。すぐに建てられたが、昭和四十年(一九六五)に壊滅に瀕したため、無名庵と共に建てられた。翁堂の近くに立つと、線香の高雅な香りがただよい、遠い世の芭蕉を、私はひそかに想起していた。

無名庵は、木曾塚の後方にあり、瓦葺平屋建で端正なたたずまいを見せている。翁堂同様、宝暦十三年に参詣した蝶夢が、他に協力を求めて再興し、安政三年には類焼にあつたが、同年内に改築、昭和四十年に改築された。初代庵主は芭蕉、二代目は丈草と続き、現在は十九代工藤芝蘭子である。門をくぐつてすぐ左方に、義仲寺昭和再建碑がある。この碑は、評論家保田与重郎氏撰文揮毫によるもので、昭和四十二年四月末に完成し、五月十日に建立を終つてゐる(『義仲寺』第四、五号、藤村作編『日本文学大辞典』参照)。

木々の間に小さきまぎまぎの句碑が散在しているが、伊勢の俳人、又玄の有名な句、

木曾殿と背中合せの寒さかな
もそのひとつである。

境内を一巡したあと、翁堂に面してすわりながら、閑静の境地をかみしめた。かけひの水音から、『徒然草』十一段の「木の間に埋るるかけひの雫ならではつゆおとなふものなし」という一文を想起した。今はさすがに時代も異り、時々、車の走音が聞えたが、去りがたい所であつた。

齋藤石鼎御住職のお話によると、無名庵で『奥の細道』輪読会や句会、歌会が催されているそうである。さらに御住職は、芭蕉の漂泊の心や偉大さ、文化財保存の意義なども話された。

芭蕉は、元禄四年に「行く春をの句を作り、近江の人々に対する愛着心を示している。また『芭蕉翁行状記』によると、芭蕉の言葉として、「木曾塚の庵はわすれがたき所也」と伝え、「から(骸)は木曾塚に送るべし。爰は東西のちまた、さき波よき渚なれば、生前の契深かりし所也。懐しき友達のたづねよからんもわづらはしからじ」。とも伝えてゐる。私は芭蕉の遺言とはいへ、世俗的には不幸な生涯を終えた義仲と芭蕉との両墓が並んでいることに、一抹の悲哀感を抱く。

旅に生き、「俳聖」と称されるまでに至つた、痛ましいほどの求道者芭蕉の永住の地が、義仲寺境内である。そのことを再認識して、感慨深く義仲寺をあとにした。

(竹島智子)